

医療維新

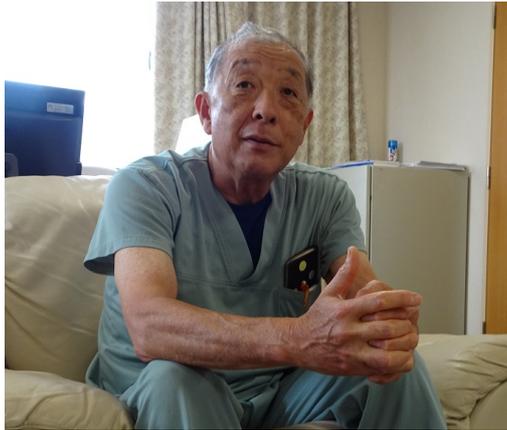
「総合医の養成」は地域病院の使命 - 花輪峰夫・秩父病院院長に聞く ◆Vol.2

行きすぎた専門医志向に危機感

レポート 2017年6月30日 (金)配信 高橋直純 (m3.com編集部)

インタビュー1回目はこちら⇒夢見た地域完結の医療、「今は無力感と脱力感」 - 花輪峰夫・秩父病院院長に聞く
◆Vol.1

——今年4月の日本外科学会定期学術集会では、特別企画「今こそ地域医療を考える」の中で、「研修医の視点に学ぶ格差解消への模索と地域医療の役割」と題してお話しをされていました。



花輪峰夫・秩父病院院長

私自身にも言えることですが、近年医師個人の対応能力は大幅に縮小していると言わざるを得ません。特に若い医師達は、極端な専門医志向と教育の結果、その傾向が著しいと思います。あるとき、当院に来ていた研修医が「目からウロコでした」と言ったのですが、何かと思ったら「アップって開腹するんですね。こんなに直ぐ終わるのですか」。

私の方が目玉が落ちそうになりました。今や鏡視下手術が全盛ですが、10分やそこらで終わる小児のアップやヘルニアを、挿管全身麻酔下、腹腔鏡下で行うことには納得がいきません。私は自分の孫にはそうした手術をやりたいとは絶対に思いません。

もちろん、鏡視下手術は素晴らしい手術です。ラパコレについては、当院では1987年にフランスで行われた5年後の1992年には導入し、今や胆嚢切除の8割以上を行っています。ただ、若い医師への教育的観点からみれば「何でも鏡視下手術」はいかがなものでしょうか。開腹も、手縫いも、糸結びもできない外科医ができるとすれば恐ろしいことです。

——医師養成の在り方についてはどのようなお考えでしょうか。

今の初期臨床研修制度はどちらかと言えば賛成です。直ぐに役立たないかもしれませんが、たとえそうであっても、医師の人生は長いので、2年ぐらいいいじゃないかと思えます。ローテーションには外科が必須であってほしいとお思います。

現在は専門医志向が行き過ぎています。実際の地域医療の現場では、各科の専門医がそろっているわけではなく、特に夜間救急では1人で何でも診なくてはならず、ほとんどが自分にとって専門外です。どんな医師でも、ある程度はオールマイティに対応でき、最低限トリアージができなくてはならないはずで。

大学病院では「訴訟が怖いから専門外の患者は診るな」と教育しているらしいですが、これは患者を断る正統な理由にはならない。それが通ると地域医療は崩壊し、医師の権威は地に落ちてしまいます。

——どのような医師養成の在り方が望ましいのでしょうか。

今求められているのは「総合医」の養成でしょう。それは新しい総合診療専門医とは違います。総合医には背骨が必要で、何かの専門医を取った上で、幅を広げていくべきです。進路に迷っている若手には、総合診療専門医ではなく、まず外科か内科の専門医を取ることを勧めています。

人を癒やすという意味において、また若い医師の教育や自己研鑽の場として、地域の臨床医療は、大学病院などに劣っているとは思っていません。もちろんどちらが良いと競うべきものではなく、お互いが補完し合うべきでしょう。

私は総合医を「器が大きく、懐が深く、成熟度の高い医師」と定義したいです。それは3年程度ではできないです。だからこそ、「総合医の養成」は地域病院の使命だと考えています。

——病院にとって研修医を受け入れる意義はどのようなものなのでしょうか。

当院は臨床研修の協力施設として、埼玉医科大学病院、同国際医療センター、同総合医療センター、日本医科大学付属病院、同千葉北総病院、同武蔵小杉病院の研修医を受け入れています。2005年度からこれまでに既に100人以上の先生方が当院で学んでおります。

研修医を受け入れるのは負担にもなりますが、総じて若い人がいるというのは好ましいと思っています。戦力としてだけでなく、何より病院に活気もたらされます。毎年、3月は大学からの研修がなく、受け入れが減りますが、院内も何となく活力が消えた感じとなります。

さらに言うと、夜間救急に応援に来てくれる先生の多くは、うちで研修をしたOBです。うちのスタッフでも、私もそうですが、副院長、診療部長、外科部長も地元の熊谷高校出身です。地元で育った人、縁を感じてくれた人は愛着心も生まれます。病院を知ってもらえるというのも、大きなメリットです。

2015年度には当院で学んだ研修医やOBらが集う「秩父花仁塾」という私塾を作りました。塾では困った症例をともに検討したり、相談を受け付けたりするほか、レジャーや懇親会も行っています。何人が「当院で教わった」という自覚があるかわかりませんが、「一緒に学んだ」ことは確かです。何かしらをつかんでくれていると嬉しいです。



花輪院長と研修医たち